【39】

氏　名（国籍）	余　志清（中　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　3871　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**中国少数民族における「漢化」の動態的分析** －貴州省貴陽市周辺のプイ族の事例から－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	古家信平
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	真野俊和
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	丸山　宏
副　査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は貴州省貴陽市周辺のプイ族を事例とし，現代中国における少数民族の「漢化」の実態を明らかにし，その意味を考察するものである。これまでの漢族側からの漢化研究では，少数民族の漢化を不可逆的な変化と見て，そこから漢族の社会や文化の特質を抽出しようというアプローチがなされてきたが，この論文では自民族研究としての「漢化」研究の立場から，プイ族の視点で儀礼と社会組織を軸とした実態の記述を行い，分析を試みる。

序章では，研究史を整理して，少数民族の不可逆的な漢化は同化と言い換えられ，漢化（漢族の文化装置を採用する行為）と漢族化（漢族になる行為）とは分析概念として分けるべきであるとの主張や，双方向の現象と見るべきであるなどとする見解を批判して，漢族との間の適応を模索する過程として漢化を検証する方法をとるとする。このため，中央政府の統治政策の変遷を考慮したプイ族の歴史と，それを反映する口頭伝承，族譜や儀礼で用いられる教典を分析の対象とすると述べる。これらの資料収集のため，貴陽市周辺での現地調査を2000年8月から，毎回1ケ月から1ケ月半の期間で8回行った。

本文は2部で構成され，第1部「族譜と宗族組織－プイ族「漢化」の諸相－」では，3章にわたり，漢族で家族・親族を支えるとされる父系出自原理のプイ族社会での機能と，中国各地で盛んになってきた宗族の再興を検討する。

第1章「族譜」では，プイ族にとって族譜は所有者の地位と正統性を象徴するもので，一族の人にも見せようとしない神秘性を持つ場合があり，この点で先祖の業績を顕彰し，宗族の団結を図るという漢族の族譜と位置づけが異なることを指摘する。口承資料ではプイ族は漢族の子孫であるという出自が主張されるが，それは貴州省に移住してきた漢族との日常的な接触・交流の中で選択され，構成されたものであることを明らかにし，中華世界の中心に結びつけようとする意識の現れとする。その一方，半世紀ほど前の民族識別によってプイ族という政治的な「民族成分」の規定がなされ，プイ族の特徴を再確認し，民族的伝統を復興・創出する動きが生じていることを指摘する。

第2章「プイ族における宗族組織」では，これまでプイ族の宗族組織に関しては概説的な記述にとどまっ

ていたことに鑑み，貴陽市花渓区花渓郷の３つの村の宗族組織を報告する。中華人民共和国成立以前はその地の宗族は祭祀田を保有し，作物の半分を清明祭参会者の食糧としたり，祖先祭祀などを共同で行っていたが，位牌を祀る祀堂はほとんど建てられず，それは科挙合格者がほとんど現れないプイ族宗族には至難のことであったためと指摘する。一方，プイ族の村には婚姻，土地売買，窃盗，殺人などの調停を行い，村の規約を定め，祭祀活動を指揮する「寨老」が統率者としており，さらに，複数の村落から結成された「榔団連盟」といわれる組織が村落構成員の間に起こった様々な問題を合議で解決していた。元・明代の土司制，清代の改土帰流，民国期の保甲制などもこうした村落の自治組織に介入できなかったといわれ，宗族組織もこれらにより，さらなる発達が阻害された。しかし，組織面での未発達にもかかわらず，「同宗」の間の結婚が禁じられるなど，宗族観念は根強く存在していることを明らかにした。

第３章「プイ族社会における宗族再興の動き－龍氏一族の例を通して－」では，2001 年に開始された龍氏一族の族譜再編の過程を報告し，同じく龍姓である漢族の族譜再編の動きと対比して，その特徴を探っている。どちらも族譜の再編を宗族連合の再統合を達成する象徴と位置づけ，族人は経費の負担に応じ，祖先の業績を顕彰し，字輩を重要視しているが，プイ族の龍氏では，族譜編纂により３年ごとの清明祭に始祖の墓に墓参したり，他の支系の族人の結婚式や葬式に参加するようになるなど，成員間の交流が促され，新たなネットワークの形成に寄与していること。支系を探る際に口頭で伝承されているプイ語の諺が手がかりになり，儀礼の場面ではプイ語の山歌を歌い競うなど，プイ族の文化が強調されていること。その反面，龍の氏姓の原点を黄帝にまでさかのぼり，全国龍氏の宗譜にまで結合することを願い「中華民族」の一員であることを強調していることなどを指摘した。プイ族にとって漢族の文化装置を借用して社会的地位の向上を図り，漢族と一体の政治的関係や人間関係は作らないところに，同化とはいえない適応の過程を見ることが出来るとする。

第２部「儀礼の構造－民族独自性の維持－」では，２章にわたり，貴陽市花渓区大寨村で 64 歳になる霊的職能者プモ班世顕氏の儀礼行為，教典，儀礼の解釈を分析し，その全体像を明らかにすることと，漢族の信仰との対比により「漢化」を検討する。

第１章「プイ族における霊的職能者プモとその儀礼」では，プモの儀礼を葬儀と供養，病気治療，穢れ除け，謝土，子授け，生命力強化に分類し，病気治療と生命力強化儀礼を３例検討する。それらは著者が 2003 年に観察記録したもので，時間の経過にしたがって所作，読まれる教典，供物等の配列などが記述される。道教の最高神である元始天尊をパォルトというプイ族の造化の神に当てたり，道教の女神聖母娘娘をプイ族の女神リャリャマにあてるなど，在来の性格の近似する神に外来の神の威力を重ねる形をとって，加護する力を強化していること，ほとんどプイ語の教典を用いる儀礼からは漢語の「神」「鬼」「祖先」に置き換えられないプイ族の霊的観念がうかがえ，漢語からの借用語（神煞など）にもプイ族の世界観が反映することを指摘する。これらのことから，プモは道教などの儀礼の構造を導入し，プモ儀礼の体系を整えてきたとする。第２章「葬送儀礼」では，2001 年に参与観察した葬送儀礼を記述し，そこからプイ族固有の儀礼の文脈が整理できるとする。死霊を祖先界に帰すために，引魂幡を放ち，牛たたき，ビンワン経の詠唱などが行われ，現在はすでに使わなくなった古風な服を着せ，プイ語で経を詠むことで先祖に死者の霊を認めてもらおうとしている。葬送儀礼の中には成服，点主の儀礼や，墓地に意味づけを与える風水観念など漢族から受容した要素が見られるが，それらは死後，祖先界に帰り，歴代の先祖たちと団らんし共に暮らすという他界観に組み込まれ，儀礼の体系化に寄与するものであるとした。

結章では，以上の検討をまとめて，プイ族にとって，族譜や宗族組織は中国社会の中で安定を得，上昇を図る一つの手段であり，正統性の確保と権威の確立を目指すものであった。儒教の作法や「慎終追遠」（父母の葬祭を丁重に行い，祖先を銘記する）の観念を受け入れ，道教の影響による謝土などが見られるが，それらは霊魂の行方にかかわるプイ族の主要な関心を彩る装置として配置されている，と結論づける。

最後に資料として，第2部で取り上げた儀礼で用いられるビンワン経のプイ語原文，中国語訳，日本語訳を付す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

1949年の中華人民共和国成立以降の土地改革による共有地の解体や，文化大革命による宗族の否定によって宗族組織はその基盤を失ったが，著者は近年の宗族復興運動について，現地調査に基づく詳細な資料，特に族譜再編の作業過程を検討しこの分野の研究の欠落を埋めたばかりでなく，プイ族の側から漢族の族譜再編との対比によって特質を明らかにしたことは漢化研究を一歩進めたものといえる。観察記録に基づくプモの儀礼の記述は，霊的職能者の信頼を得て，公にされにくい資料も提示され，他界へと魂を誘うプイ族の葬礼のあり方を明らかにし，漢化が彼らの根幹を揺るがすものではないとしたことは高く評価できよう。

ただ，プモからの調査で得た多くの儀礼解説やその解釈は，資料編で報告されただけでも高い価値があり，ビンワン経の和訳を試みたことも評価できるとしても，そこに含まれる漢籍の位置づけも漢化との関連で言及してほしかった。また，霊的職能者は儀礼に女性が立ち入ることを嫌うために，儀礼の現場の調査に限界が見られることも残念なことである。こうしたいくつか物足りない点はあるものの，プイ族自身による漢化の研究として，学界への寄与は大きいと考えられる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。